

徳大病院

102歳の心臓手術成功

先端治療 TAVI 最高齢事例に並ぶ

徳島大学病院が、心臓の病気「大動脈弁狭窄症」を大動脈弁が硬くなることで発症した102歳の男性患者に対し、血管にカテーテルを挿入して人工弁を取り付ける先端手術を2月に行い、成功した。同病院によると、同じ手術では、2019年に昭和大学江東豊洲病院（東京）で行われた事例や15年に台湾の病院で報告された事例と並び、国内外の最高齢。



カテーテルを使った心臓の先端手術で人工弁を取り付けた米田さん（左）と診察する伊勢医師＝徳島市の徳島大学病院

の手術時は102歳だった。実施した手術は経カテーテル大動脈弁置換術（TAVI）で、循環器内科の伊勢孝之医師が執刀した。専用のカテーテルを右脚付け根の動脈から入れて心臓の患部に人工弁を取り付け、1時間で終えた。術後の経過も良好という。米田さんは息切れがひどくなったため、1月にかかりつけ医の紹介で同病院を受診。検査の結果、大動脈弁が石灰化して血流が悪くなっており、大動脈弁狭窄症と診断された。病院は、開胸手術に比べ

て体への負担が小さいTAVIを検討。同病院での例で最高齢だった96歳を上回っていたが、心臓以外に目立った疾患がなく、体力的な問題もなかったため、手術を決めた。同病院は17年度からTAVIを始めた。心臓血管外科や循環器内科などに所属する医師や看護師、技師ら約20人で専門家グループ「ハートチーム」を結成。専門分野の知識や経験を融合し、手術の計画作りから術中の連携、術後のケアまで一貫して取り組んでいる。現在はほぼ週1回の手術を実施。当初2時間程度だった所要時間は約1時間に短縮され、患者の負担軽減につながっている。

米田さんの手術でも過去150例以上の経験が生かされた。高齢になるほど高まる心筋梗塞や脳梗塞といった合併症のリスクを軽減することに注力し、術前には入念に画像解析などに取り組んだ。術中もエックス線による透視画像や心電図などで異変の有無を確認した。

1週間ほどで退院した米田さんは歩行中の息切れがほとんどなくなったといい、「手術を受けて良かった。家庭菜園にも取り組みたい」と意欲を見せる。伊勢医師は「高齢を理由に手術を諦めている患者は多い。100歳を超えても治療できる可能性があるので相談してほしい」と話した。

Q 大動脈弁狭窄症 心臓と大動脈の間にある弁が石灰化などで硬くなり、弁の開閉が制限されるため血液の通り道が狭くなる病気。重症化すると、動悸（どうき）や息切れ、疲れやすいといった症状につながる。重症者の5年生存率は20%。75歳以上の重症患者は県内で約3300人。治療は人工心肺装置を使って心臓を止

め、人工弁などに取り替える開胸手術が基本だが、80歳以上の体力のない患者は難しい。TAVIは主に80歳以上が対象で、年齢の上限はない。開胸手術が5〜6時間かかるのに対して約1時間で済み、カテーテルを入れる傷口が数センチと小さいため体への負担が小さい。人工弁の寿命は10年程度で、開胸手術とはほぼ同じ。

（南志郎）